

ヴァルター・フォン・デル・フォーゲルヴァイデ (その二)

西田, 越郎

<https://doi.org/10.15017/2332873>

出版情報 : 文學研究. 55, pp.25-34, 1956-09-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

ヴァルター・フォン・デル・フォーゲルヴァイデ (その二)

西田越郎

ヴァルター・フォン・デル・フォーゲルヴァイデがヴィーンの宮廷において、ラインマル・フォン・ハーゲナウを師として詩人の道をふみ出したことは前述のとおりである。いましばらくヴァルター、ラインマル両詩人の関係について筆をとどめることにしよう。

ラインマルはフリードリヒ・フォン・ハウゼンやフリードリヒ・フォン・モールンゲンなどと共にならび称される十二世紀末の最も偉大な詩人である。しかし他の多くの詩人と同じく、その生涯は詳かでない。彼の名をとどめた記録もなく、また彼の詩は後にも述べるように、まったく現実性に乏しいことがむしろその特徴となつている程であるから、ヴァルターの場合のように、そこから詩人の生涯を推測することも出来ない。だがゴットフリート・フォン・シュトラースブルクが、『トリスタン』(4773行)において、ラインマルの死を悼み、彼をミンネゼンガーの合唱をひきいる「ハーゲナウの小夜啼鳥」とよび、彼の舌には *alter danc houbstist* 歌の最高の技が封じ込まれていると讃えたように、彼はヴァルターとならんで、同時代および後代の人々に最も愛せられ、尊敬を受けた抒情詩人であつた。一一六〇年から六五年の間

にうまれ、一二〇七年から一〇年の間に歿したという。同名の他の詩人と区別するために *Reinmar der Alte* とも称せられ、*ユットフリート* のいうハーゲナウ *Hagenau* を附してよぶのが普通であるが、この地名についても疑問があり、彼の活動の舞台がヴィーンであるため、上部オーストリアのイン河畔ブラウナウに近いハーゲナウを生地とする人もあるが、アルサスのハーゲナウとするのが大方の説である。ラインマルはバーベンベルク公のレオポルト五世およびフリードリヒ一世に任せ、宮廷詩人として比較的平穩な生活を送つたらしい。

ラインマルの詩風は、遠くプロヴァンスに發するトゥルバドゥールの流れをくむものであつた。元来トゥルバドゥールの文学はドイツ国内でも特にライン地方に強い影響を与え、ライン下流のフランドル地方からは「純正な韻律の創始者」といわれるハインリヒ・フォン・フェルデゲが現われ、ついでこのフランスの影響はライン上流地方にも伝えられた。後者を代表するのがラインマルである。既に一一五〇年頃、オーストリアのドナウ流域にはキューレンベルクの詩人などによる *Völsied* を思わせる抒情詩が存在したが、フランスより伝来したこの新しい抒情詩は、主と

して宮廷に栄え、甚だロマン化されたもので、そのフランス的な繊細な優雅さが、ドイツに古くからある抒情詩の単純素朴な感情に附加されることになった。そしてここに *Kunstlyrik* としての *ミンネザング* が成立する。*ミンネザング* は、形式的には表現の技巧を競い、また内容から云えば、それはまづたく フライング 婦人奉仕に限定されている。*ミンネ* とは婦人崇拜の一形式であり、宮廷騎士の生き方の一つの典型であつたと云えるのである。貴婦人 *Frouwe* の寵を得るために、憧憬をもやしつゝ、型にはまつた奉仕をする。現今普通に用いられる愛 *Liebe* が男女の結合をもつて実現されるのに対して、*ミンネ minne* は対極性をその著しい特徴とみてよいであらう。さて *ミンネ* をうたう詩人と *Frouwe*、階級の上からは *herin* とを結ぶものは、ただ「憧憬」の思念があるばかりである。従つて *ミンネザング* は所謂体験の文学 *Erlebnisdichtung* ではなく、ただ形式を主とする文学とならざるを得ない。

宮廷社会においては、*zucht* *mæc* *stæte* *höher muot* をつねに保つことが要求されるが、これらの諸々の *tugent* は、この抒情詩においても理想とされ、それらによつて情熱的な感情の披瀝は抑制されねばならなかつた。従つて *ミンネザング* は、抒情的な感情よりはむしろ、情感にあふれた省察をその重要な主題とすることになり、*ミンネ* の本質・概念とか、*ミンネ* のよこび、極みなどについての説明に重きが置かれるのである。所謂 *Red-existenzlyrik* である。またこれらの抒情詩には、上述のことから当然、自然その他外界の事象はほとんど排除されているから、ごく僅かな例外を除いては、新鮮な生命のいぶきを欠いていることは止むを得ないであらう。

このような傾向をもつた *ミンネザング* の代表詩人が *ラインマル* であつた。この抒情詩が彼によつて *ライン* 地方から、オーストリアに移し植えられたのである。*ラテン* 的繊細な優雅さは、同時に空想を、さらには虚ろなものを伴つて、やがてこの抒情詩の一つの因襲的なものとなつてつきまとう。*ミンネ* は、強い熱情的憧憬の衷心からの流露ではなくて、一種の遊戯に墮してしまふ傾向があつた。*ラインマル* の恋愛詩は、その完備した形式をもつて顕著な特徴としており、当時の抒情詩の一極点を示すものであるが、そこにはすでに、因襲から来る固定化が、形式的な表面性が強く認められることは否定出来ない。*ラインマル* の詩の多くは、報いられぬ *ミンネ* をなげく *Klagelied* であり、その形象を欠いた *モノトーン* な調子のかげに、詩人の個性は埋没している。*ラインマル* の今日残されている詩の主要なものは、*Zykus* と称せられる三十の詩から成るものであるが、これはいわゆる *höhe minne* をテーマとする *ヴァリエーション* で、貴婦人への讚美、憧憬、聞き届けられぬ愛、懇願、歎き、また *Frouwe* 自身の心の動揺などの *モチーフ* が用いられている。そしてこれらの *モチーフ* は詩人のすぐれた技巧により、さまざまな緊張をはらみながら、展開されてゆくのである。しかしこれは現実を遠く離れた概念の戯戯という印象はおうべくもない。

さて *ヴァルター* は *ラインマル* の教えを受けたのであるから、それをひきついた初期の *ミンネザング* が *ラインマル* の芸術の制約下に置かれ、著しい影響を受けていることは当然であらう。それは *ラインマル* の駆使した形式・技巧の模倣にとどまらず、内容的にもその詩風の範囲を出ることは出来なかつた。そして新鮮な個性

味に乏しい結果を産むことになった。ブルダッハの言葉を借りれば、ラインマルにおけると同様、「熱情と活気を欠いた蒼白な、つやのない相貌を呈し、ほのかな薄明りが、その上に拡がって、そこでは一切の輪廓が朦朧となる。」

ラインマルとヴァルターとの間には、十才の年齢の差があつたし、*mäze* の詩人であり、*Klage* の詩人であり、また宮廷社会の典型的代表者でもあつたラインマルと、情熱的な明るい気質の持主ヴァルターとが必ずしもしくり行かなかつたであらうことは想像される。両詩人の關係が緊張をはらんでいたことは、ヴァルターがラインマルの死を追悼した詩、82,24 および 83,1 にもうかがわれる。性格上の相違の他に、次第に成長しつつあるヴァルターの姿を、ラインマルが嫉妬のまなざしをもつて見やつたことも考えられる。いづれにしても恐らく親密な結びつきを得ることは難しかつたようである。師弟の關係がやがて對抗者のそれに變つてゆく。むしろ、それは許しがたい真の敵対という程のもではなかつたにしろ、ヴァルターがラインマルの制約を克服離脱しようとする一つの過程と見なければならぬ。

この両詩人のあいだの緊張はいかなる形をとつたであらうか。それは文学論争という形をとつて表面にあらわれたのである。そして断続しながらほぼ十年の間つき、ラインマルの死をもつて緊張はとけることになる。後代にも文学論争と称せられるものは、少くない。ゲーテ・シラーによるちむゆる Xentenkampf など、そのもつとも著名なものであらうが、ラインマル——ヴァルターのそれは、恐らく最初のものといえるのではなからうか。ただこの種の争いが多く紙の上でなされたものであるのに対して、ライ

ンマル・ヴァルターの場合は、いわば面とむかつてなされなければならなかつた。当時の詩人は、宮廷の人士を前にして詩を吟誦するのが通例であつたから、相當な勇氣を要したと思われる。以下簡単にその経過を辿つてみよう。

その端緒となつたのは、恐らく *Herre got, gesegene mich vor sorgen* (115, 6) にほじめるヴァルターの詩であらうと考へてゐる。その第三節

Als ich under wilen zir gesitze,
sô si mich mit ir reden lat,
sô benimt si mir sô gar die witze,
daz mir der lip alumne gât.
swenne ich iezuo wunder rede kan,
gesihet si mich einest an,
sô hân ichs vergezen,
waz wolde ich dar gesezen.

(大意 時折彼女の傍らに坐つて、話をしていると、彼女は私の悟性を完全に奪つてしまつて、私はめまいがしてくる。話すことが沢山あつても、そばに坐ると、何を話そうと思つたのか忘れてしまふ。)

これに対してラインマルは *Ich will allez gâhen* (MF 170, 1) において、若い愚者に訓戒を垂れて、婦人の前に出て行くのほうのように黙つて坐つてゐる者は、たち去つて、しかるべき振舞を心得た他の人に譲るがよからうと。かゝる訓戒をたまつて聞いて

いるヴァルターではないから、彼はたちまち鋭くやりかえした。

Ein man verbittet ane pfihnt
ein spil, des nieman im wol volge geben mac.
er gihet, swenne ein wip ersiht
sin ouge, ir si mat sin osterlicher tac.
wir wære uns andern luten sô geschen,
solt wir im alle sines willen jehen?
ich bin der imez versprechen muoz:
bezzet wære miner frôwen senfter gruo.
deist mates buoz. (111, 23)

ラインマルが愛する婦人の完璧な徳を讃える誇張された調子に対する、ヴァルターの反撥がこゝにはうかがわれるのだが、それを纏うつ、ラインマルの讚美する婦人の答という形式で次のように述べられる。

Ich bin ein wip dà her gewesen
sô stræle an èren und auch alsô wol gemuot:
ich trûwe ouch noch vil wol genesen,
daz mir mit stelne nieman keinen schaden tuot.
swer küssen hie ze mir gewinnen wil,
der werbe ab ez mit fuoge und anderm spil.
ist daz ez im wirt sus iesâ,
er muoz sin iemer sin mîn diep, und habe imz dà
und anderswâ.'

これはラインマルが、ある詩において、いつもの手法を離れて具體的に、愛人から奪う口づけの夢をうたつたことを巧みに利用して、その愛する婦人の口を通して語らせるというすぐなる大胆なやり方なのである。総じてヴァルターのラインマルに対する反撥の表現は、相手の好んで用いる言い廻しや詩句を巧妙に利用するところ、一種の「ロキエー」の形式をとつていふことが注目される。若くはヴァルターを襲つた運命の変転は、彼をして苦難の漂泊の旅へと導いて行つたが、それと共にこの両詩人の争いもしばしば中断されることになつた。ヴァルターが一二〇三年の秋再びウィーンに足をたむかふことになつたとを、ラインマルの MF 105, 10 の Preislied に対するヴァルターの答が、Ir sult sprechen willekomen (56, 14) にあり、長い旅の間に得た体験からうまれた彼の新しい思想、新しいうたのひびきをそこに認めることが出来る。

Ich hân lande vil gesehen
unde nam der besten gerne war:
ûbel nûeze mir geschehen,
kunde ich ie mîn herze bringen dar
daz im wol gevallen
wolde fremeder site.
nû waz hulfe mich, ob ich unrehte strite?
tiuschiu zucht gât vor in allen.
Von den Elbe unz an den Rin
und her wîder unz an Ungerlant

mugen wol die besten sîn,

die ich in der werltie hân erkant.

kan ich rehte schouwen

gnot gelâz unt lip.

sen mir got, sô swîtere ich wol daz hie diu wîp

bezzet sint danne ander frouwen.

われわれはこのラインマルス、ヴァルターの Polemik を讀んで、
ヴァルターが一つの過渡期をこのカインツのラウネを説く。た
たわが筆は、frouwe の讚美、frouwe を偶像視するとなつた
höhe minne を本體とした ebene minne の筆を、ラウネの
が出来ぬとなす。

同詩人の争つてゐる以上で筆をとる。ちつヴァルター
がラインマルスの影響のもとに作つたものとして、Saget mir
ieman, waz ist minnet? (69, 1) を筆を執つてラウネが出来ぬ。
これは、ミンネの本質として、このカインツの、全ベナロン 語によつ
て、カインツの、その理 Min frouwe ist underwiltent hie (44,
11) が、Min frouwe ist ein ungenædic wîp (52, 23) 等、カインツ
の語を、カインツのラウネの、カインツ の所説 Botenlieder (112,
35 u. 120, 16) の同様、カインツ の Botenlieder の形式を證
據してゐる。その 112, 35 を次に採つて置かう。

Frowe, vernemt dur got von mir diz mære:

ich bin ein bote und sol iu sagen,

ir sint wenden einen ritter swære,

der si lange hât getragen.

daz sol ich iu künden sô:

ob ir in welt fröiden rîchen,

sicherlichen

des wirt manic herze frô.

Frowe, enlat iuch des sô nîht verdriezen,

ir engebt im höhen muot.

des muget ir und alle wol geniezen,

den ouch fröide sanfte tuot.

dâ von wirt sîn sîn bereit,

ob ir in ze fröiden bringet,

daz er singet

iuwer êre und werdekeit.

Frowe, sendet im ein höghemüete,

sit an iu sîn fröide stât.

er mac wol geniezen iuwer güete,

sit diu tugent und êre hât.

frowe, gebt im höhen muot.

welt ir, sîn trûren ist verkeret,

daz in lêret

daz er daz beste gerne tuot.

貴婦人に対するたひかけ、frowe をあつてはじまり、騎士が久

しく胸に抱つてゐる悲哀を察して、カインツの告げる使命をおひ

私の言葉に耳をかし給えと呼びかけ、おんみが悦びを豊かにするなり、かならずや多くの人の心が悦びに輝くをあらうとて、第三節では騎士の徳と名譽とに触れ、前の願いが再びくりかえされる。ここにうたわれたるものは、騎士は恩寵の如何に拘らず、婦人に奉仕し、うたをもちつてほめ讃えることによつて婦人の愛を得ようとする當時のミンネザンに於けるミンネの本質を一步も出づらない。表現はいかにも苦へ、そして無垢な感ぜを与えてたゞだ。

次に挙げたる一詩は、『春と婦人』(Frühling und Frauen)と普通稱せられたるもの。

Sô die bluomen ûz dem grase dringent,
 same si lachen gegen der spilden sunnen,
 in einem meien an dem morgen fruon,
 und diu kleinen vogellîn wol singent
 in ir besten wise die si kunnen,
 waz wîne mac sich dâ gelîchen zuo?
 ez ist wol halb ein himelriche.
 suln wir sprechen waz sich deme gelîche,
 Sô sage ich waz mir dicke baz
 in minen ougen hât getân,
 und tæte ouch noch, gesæhe ich daz.

Swâ ein edeliu schöne frowe reine,
 wol gekleidet unde wol gebunden,

dur kurzwile zuo vil luten gât,
 howelichen hohgennot, niht eine,
 unbe sehende ein wênic under stunden,
 alsam der sunne gegen den sternn stât, —
 der meie bringe uns al sin wunder,
 waz ist dâ sô wînneliches under,
 als ir vil minnelicher lip?
 wir lâzen alle bluomen stân,
 und kapfen an daz werde wîp.

Nû wol dan, welt ir die wârheit schouwen!
 gên wir zuo des meien hohgeziel
 der ist mit aller siner krefte komen,
 seht an in und seht an schöne frouwen,
 wederz dâ daz ander überstrite:
 daz bezzer spil, ob ich daz hân genomen.
 owê der mich dâ welen hieze,
 deich daz eine dur daz ander lieze,
 wie rehte schiere ich danne kûr!
 hêr Meie, ir müeset merze sîn,
 ê ich min frouwen dâ verlûr. (45, 37—)

こゝでは、結局自然の否定に終つてしまふことによつて、まだライ
 シマル流を脱けきつていないけれども、最初の数行などは、ヴァ
 ルターがそれとその真実の姿を現わすといふべき気配の感ぜられる

ことで、意味深いものといわねばならない。

古い因襲に束縛されて、空虚な内容と単調な形式の域を脱しなかつたヴァルターのミンネザングは、すでに徐々に変貌をとげ、自然に対する意識がかなり顕著になつて来たことを見逃してはならない。これはすでに挙げた 39「」にも見られるが、『春と婦人』にうかがわれるような生き生きとした自然感情は、ハウゼンやラインマルのミンネザングには見られなかつたところで、季節のもつ魅力への沈黙が破られたことは、ヴァルターの初期の詩からは自然がまつたく排除されていたことを考えれば、重要な意義を持つものと云うことが出来る。

ヴァルターの抒情詩の展開の迹を辿ると、初期のミンネザングが次第に個性的内容を与えられて、新鮮潑刺たる相貌を呈してゆくことに一種の驚きをさえ感ずる。ヴァルターのミンネザング創作の時期は、かなり長期にわたつてゐるが、恐らく彼が一一九八年——彼の生涯における宿命の年であつたが——ヴィーンの宮廷を去つて漂泊の旅に出、その途次における様々な体験が大きな影響を及ぼしてゐるのであらう。この時代になめたきびしい苦闘を通じて、排他的な Standespoesie や技巧の遊戯から、真の感情に支えられた愛や自然の歌へと導かれていつたのである。

また『夢判断』(Traumdeutung)と題される詩では次のようにたわわてゐる。

Dø der sumer komen was

und die blumen dur daz gras

wünneclichen sprungen,
aldå die vogele sungen,
dø kom ich gegangen
an einen anger langen,
då ein lüter brunne entspranc :
vor dem walde was sin ganc,
då din nahtegale sanc.

Bi dem brunnen stunt ein boum :
då gesach ich einen troum.
ich was von der sunnen
entwischen zuo dem brunnen,
daz diu linde mære
mir küelen schaten bære.
bi dem brunnen ich gesaz,
miner sorgen ich vergaz,
schieer entslief ich umbe daz.
.....

われわれはこれらをはじめ、幾つかの詩によつて、ヴァルターの自然観の深きを知ることが出来るのである。

ヴァルターは常に、これら自然をうたつた抒情詩、あるいは恋詩愛において、外面的なものを内面化することに成功した。五月の自然と婦人とを対置することによつて、またかの有名な『菩提樹の下』の詩における、恋人たちと遠いナハティガルの声とを対置することによつて、そこに健康な青春の悦びを讃えたのである。

ヴァルターのこの巧みな転化の根底を形成するものは、彼の現実に対する鋭い観察に他ならないのである。現実を鋭く捉える眼によつてきずかれた、自由にして捉われざる精神は、やがて厳しい現実批判の武器ともなるのである。

ヴァルターは、単なる恋愛詩人として著名なばかりでなく、後述する政治詩人としての彼を看過することは出来ないのだが、ミンネに素材を限らず、時代精神に対してたえずはげしい批判を加えたことを忘れてはならない。彼がラインマルの因襲化した古い形式を打破したばかりでなく、時代への厳しい批判者となり得たのも、この自由な精神に基づくものと云わねばならない。ヴァルターがその独自の政治詩によつて、数世紀を経た今日、なお永遠の価値を失わない所以である。

『菩提樹の下に』が、「低いミンネ」すなわち下層社会の卑しい身分の乙女に対するミンネをうたつたものとして、重要な意味を持つてゐることはよく云われる。当時の婦人崇拜が、従つてミンネザングが、常にある限られた階級、すなわち貴族階級のみを対象として、偏狭な性格を帯びてゐたのに対し、ヴァルターにおいてはもはや宮廷社会の überhöhe Dame すなわち die herrin ではなく、素朴な乙女である。ヴァルターはこの女主人公に、いわゆる hohe minne ではなく、ebene minne をもつて好意をよせてゐるのである。またその背景には、もはや宮廷ではなく、華麗な自然が選ばれてゐるのである。これは従来のミンネザングに對して、全く独得な調子をもつものであり、こゝにドイツ抒情詩の歴史におけるヴァルターの決定的意義が存する。その意味で、次の一詩を引用してみよう。

Herzliebep froweln,

got gebe dir hute und iemer gut!

kund ich baz gedenden din,

des hete ich willelichen muot.

waz mac ich dir sagen mā,

wan daz dir nieman holder is? dā von ist mir vil wē.

Sie verzient mir daz ich

sō nidere wende minen sanc.

daz si niht versinent sich

waz liebe si, des haben undanc!

sie getraf diu liebe nie,

die nāch dem guote und nāch der schöne minnent:

we wie minnent die?

Bi der schoene ist dicke haz:

zer schoene niemen si ze gāch.

liebe tuot dem herzen baz:

der liebe gēt diu schoene nāch.

liebe machet schoene wip:

desn mac diu schoene niht getuon, sin machet niemer

lieben lip.

Ich vertrage als ich vertruoc

und als ich iemer wil vertragen.

du bist schœne und hæst genuoc :

vraz mugen si mir dâ von gesagen ?

swaz si sagen, ich bin dir holt,

und nim din glesin vingerlîn für einer küneginne

golt.

(49, 25)

心やさしき女よ、神の、永遠の恵みを汝に垂れ給はんことを！
わが歌を身分卑しき者に向けたといつてわれを難するものがある。愛の何たるかを知らざる者は呪わしい。財と外面の美のみによつて愛する者は愛を知らざる者。美とつとわじきものは屢々結ぶもの、むやみに外面の美を求めつはならぬ。愛は女性をおのすと美しくするが、美はしからず、美は決して優雅にはしない。

ここに於ては、身分の卑しい者にも価値が附与されてゐるのである。ヴァルターは財や外面的な美ではなくて、愛による内面的な美を発見したのである。そしてその第四節に云う、われは彼の非難をたゞ怒が、今までさうであつたように、これからいも、汝は美しく、欠けるところはない。何を更に云うことが出来よう。難するものは、その思いのまゝにするがよい。そして

und nim din glesin vingerlîn für einer küneginne golt.

「女王の金の指輪より、汝の草の指輪をとらう」と云う。ヴァルターにおける婦人崇拜は、外面的な美のみを備えた貴族社会にではなく、下層社会の女性に内面的美を、真の優雅さを発見するのである。

以上いくつかの詩について云えることは、豊かな、自由な精神から発して、ヴァルターが人間の内面の美的価値を、つまり人間性を見出したといふことであらう。

そしてこの人間性の発見は、彼が置かれた中世という時代を考慮にいられるとき、まことに驚嘆すべきことであるが、次のような詩句となつて更に拡大されるのである。すなわち

Swer âne vorhte, hêrre got,

wîl sprechen dinu zehen gebot,

und brichet diz, daz ist niht rehtiu minne.

Dich heizet vater maneger vil :

Swer mîn ze bruder niht enwîl,

der spricht diu starken wort ûz krankem sinne.

Wir wâhsen ûz gelichem dinge :

spise frumet uns, diu wirt ringe,

sô si dur den munt gevêrt.

wer kan den hêrren von dem knehte scheiden,

swa er ir gebeine blôzez fûnde,

het er ir joch lebender kûnde,

sô gewûrme dez fleisch verzert ?

im dieneht kristen juden und heiden,

der elliu lebenden wundert nert.

人類平等は、ヴァルターによれば、キリスト教徒から更にユダ

ヤその他異端の徒に押しおよぼされるのである。異端排撃のはげしかつた中世において、これは正に驚異的なことと云わねばならないだろう。

われわれは、ヴァルターを単なる恋愛詩人として捉えるのではなくて、真の人間性の告知者としての側面、いな、その基底の上になつた詩人として理解すべきではないであろうか。政治詩人として、敢て行動にも訴えたヴァルターの真実の姿も、ここにはじめて理解することが可能になると思ふのである。